



KANI PUBLIC ARTS CENTER ala

MACHI GENKI PROJECT

ala まち元気プロジェクトレポート

2020



<https://www.kpac.or.jp/ala/town/>

- 02. はじめに
- 04. alaまち元気プロジェクト
- 06. alaまち元気そうだん室
- 08. レクチャー1 「社会的処方研究所」の取り組み
- 09. レクチャー2 「暮らしの保健室」から「マギーズ東京」へ
- 10. レクチャー3 認知症対策のための演劇情動療法
- 11. レクチャー4 あーとま塾 特別編
- 12. プロジェクト1 えんげき創作ワークショップ
- 14. プロジェクト2 スマイリングワークショップ
- 16. プロジェクト3 ココロとカラダワークショップ
- 18. プロジェクト4 多文化共生プロジェクト
- 19. プロジェクト5 アーラ紙芝居一座
- 20. プロジェクト6 子どものためのワークショップ ハンドスオブガッド／親子de仲間づくりワークショップOB 編
- 22. プロジェクト7 みんなのピアノプロジェクト
- 23. プロジェクト8 子どものためのワークショップ みんなのピアノ編
- 24. プロジェクト9 アーラ映画祭 プロジェクト10 エイブル・アート展
- 25. プロジェクト11 森山威男ドラム道場 プロジェクト12 歌舞伎とおしゃべりの会
- 26. プロジェクト13 東日本大震災復興支援 祈りのコンサート
- 27. プロジェクト14 私のあしながおじさんプロジェクト
- 28. プロジェクト15 アーラ・イルミネーション プロジェクト16 劇場フロントスタッフ研修
- 29. 2020年度実績報告 / alaグッズ

はじめに

「もともと私たちはつながり、支えあい、 触れ合って生きてきた。これからも」

2020年度は新型コロナ禍の一年でした。会食の制限から飲食店の時間制限、酒類の販売禁止、営業自粛、旅行の自粛、学校では休校から始まり分散登校、給食は黙食、修学旅行や運動会や部活動の縮小など、およそ人々の喜び、楽しみ、癒しの機会がすべて奪われました。私たちはそれまで意識するとかしないにかかわらず、その喜びや楽しみや癒しから明日に向かって生きる力を蓄えながら生活していたことを痛切に自覚させられました。そしていまだに「我慢」の日々を送っています。それまでの喜びや楽しみ、癒しの経験があるからこそ我慢できるのであり、コロナが終息した後の期待も込めて今も我慢しています。

ただしこれは大人中心の考えであり、今後社会を担っていく子どもたちのことを考えると一層焦りを感じます。私たち大人は豊かな楽しい学校生活を営んだ蓄積を持っていますが、子どもたちは2年にわたる間その経験をしないまま、不満なく抵抗もできずに、知らないままに成長を続けています。知らないから我慢の量は大人よりも少ないかもしれません。しかし私は子どもたちの将来にどのような影響が出るのかが不安でなりません。人類の根源的な生存の様式を規制せざるを得ないこのコロナ禍にあって、私たちは誰もが傷ついています。その心の傷を癒し、人と人とのつながりを取り戻して再び元気に歩き出すように努めなければなりません。

2008年から取り組んでいる「まち元気プロジェクト」はもう13年間も継続しています。閉塞感に満ちた社会情勢に問題意識を持ち、文化芸術の分野からの取り組みを始めました。それまで生涯学習事業や公民館事業により、心豊かな生活を送ることができるように講座やワークショップが全国で展開されていましたが、文化芸術には生きづらさや孤独・孤立を癒し、解消する力があることに着目して継続して活動をしてきました。特に今年度は「アーラまち元気そうだん室」を発足させました。これは市民に寄り添い、それぞれの生きづらさに対する解決策を一緒に考えていくことで、心の元気を取り戻してもらい、元気なまちづくりの一翼を担いたいというものです。一地方都市の取り組みではありますが、全国の公立文化施設の取り組みに参考になれば幸いです。

可児市文化創造センター
館長 籠橋 義朗

前略、 お元気ですか

今アーラは大規模改修のため、敷地は仮囲いで覆われています。内部は足場が隅々まで組まれ、工事が進められています。その様な中でも、水と緑の広場の新緑たちは大空に向けて、一気に芽吹こうと上を向いています。

いつもなら賑わうアーラの様子を思い出してみました。

劇場のステージやロフトでパフォーマンスをする姿、チケットを手にそれぞれの想いを抱きながら鑑賞する姿、仲間と共に、先生と共に、一生懸命に練習する姿、レストランでランチやカフェを楽しむ姿、ロビーで読書、お喋り、勉強、思い思いに過ごす姿…

あたりまえの日常がとても恋しく、尊く輝いていたことに気づかされます。

今は不自由なこともたくさんありますが、そんなときこそ、心動かされた出会いや思い出をしっかりと胸に、私たちは10月のリニューアルオープンに向け、準備を進めていきます。

また、皆さんとあたりまえの日常で再会できることを強く強く願っています。

草々

2020年5月吉日

可児市文化創造センター ala スタッフ一同

お元気ですかハガキプロジェクト

大規模改修工事での休館、そしてコロナ禍の影響で直接会えない皆さんに、心を込めて1467通のハガキを送付。

コロナ禍で不安な日々に「つながり」を

大規模改修工事ではアーラが休館になっていることに加え、新型コロナウイルスの影響により、外出自粛で直接人と会えない日々。アーラからの手紙で、少しでもつながりを感じて、ほっとしてもらおうと、職員がデザインしたハガキを、いつも公演を楽しみにしてくれているお客様、市民参加事業やワークショップへ参加してくれている方々、施設利用者の皆様などに向けて、担当者が一筆を添えたハガキを送りました。ハガキを受け取った方からのお返事が届き、鑑賞体験がもたらす感動や喜び、コロナが収束したのちの再訪への思いを知ることができました。



MACHI GENKI PROJECT



ala まち元気プロジェクト

アーラの「まち元気プロジェクト」は、2008年から始まりました。「生きづらさ」や「生きにくさ」を感じている人々を、文化芸術の力を活用して精神的にも社会的にも孤立させないという取り組みです。文化芸術には「共創性」という、複数の人間が関わりあって新しい価値＝仲間・コミュニティをつくる力があります。この文化芸術の力で「生きる力」と「コミュニティを創出」し、社会の健全化を目指します。本プロジェクトは、市民サポーター、NPO、関係施設などたくさんの人の力に支えられています。あなたのココロが元気になって、周りの人のココロも元気にしていきたい。そんな思いで、この地域の「まち元気」をつなげていきたいと思っています。

多様な市民による
参加型公演

様々なコミュニティ作り
ワークショップ

貧困やひとり親家庭
などの家族に
平等に文化芸術を

高齢者の仲間づくり
生きがいづくり

子育ての孤立を
防ぐ仲間づくり

学校でのクラス
コミュニケーション

障がいの有無に関わらず、
文化を楽しむ環境づくり

誰もが安心して生活できる
多文化共生社会の実現



／ 劇場と地域が連携して「生きる活力」と「コミュニティの創出」を生み出します。／

ステークホルダー 連携している団体・施設・企業・個人

可児市、可児市教育委員会、市内小中学校、教育研究所・スマイリングルーム、NPO法人alaクルーズ、児童センター、図書館、地域の子ども食堂、可児市母子寡婦福祉連合会、Fun Fan ala、こども発達支援センターくれよん、(公財)岐阜県教育文化財団、アーラ映画祭実行委員会、こども達に星を見せる会、ROCK FILL JAM 制作委員会、地域のピアノ講師、NPO法人豊島子どもWAKUWAKU ネットワーク、NPO法人世界劇場会議名古屋、可児市防災の会、可児歌舞伎、ママランド、多文化共生センターフレビア、かっこ英語サポーター、可児市市民公益活動センター Meets、可児地区更生保護女性の会、可児市社会福祉協議会、岐阜医療科学大学、広眺ヶ丘サロン・三々五々、Hands of God Kindergarten(順不同)

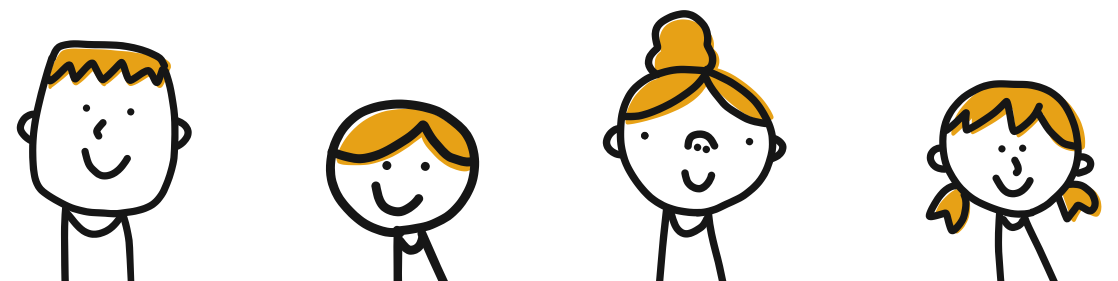
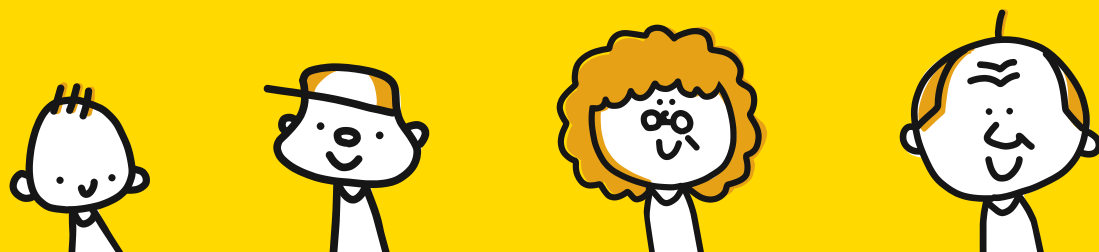
【私のあしながおじさんプロジェクト | 2020年度協賛企業】

可児ライオンズクラブ 株式会社ワンス・プランニング、加茂水道工業株式会社、KYB株式会社、国際ソロブチスト可児、信和工業株式会社、東濃信用金庫、東濃建物管理株式会社、丸茂電機株式会社、ヤマハサウンドシステム株式会社、匿名(個人)5件(順不同・敬称略)

私の
あしながおじさん
プロジェクト



(詳細はP27掲載)



“わたしたちのまち” がもっと元気になるために
文化芸術を活用した社会的処方¹の仕組み

ala まち元気 そうだん室

何かの縁で、この地域に暮らし、働き、学び、生きているすべての人たちが、何かの理由で、日々にとまどい、元気をなくして、孤独や寂しさを感じている。そんなとき、近くの劇場へ気軽に訪れて、スタッフと楽しくお話したり、自分に合った文化芸術プログラムやワークショップとつながることで、心を許せる気楽な仲間ができたり、そんな風に、みんなが支え合って、自分の力を取り戻せたら、まちも、劇場も、今よりもっと元気になれば、「まち元気そうだん室」はそうした発想から生まれた「劇場」という場所の新しい「ホスピタリティ（歓待）」のかたちです。



alaまち元気プロジェクト プロモーション動画

2021年3月、alaまち元気プロジェクトの充実、そしてまち元気そうだん室の構築のために、子育て世代、小中学生、高齢者など様々なライフステージの方に、貧困、不登校、認知症といった社会的課題に向き合ったコミュニティプログラムと先進的取り組みを学ぶレクチャーを実施しました。これは、文化庁から委託された令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業『文化芸術収益力強化事業』＜エッセンシャルワーカーとしての文化芸術「社会的処方」活動＞の実践で実施したものです。



“alaまち元気そうだん室”で 相談できること

- ① 自分に合うワークショップなど“文化芸術プログラムを紹介”してほしい
- ② 文化芸術プログラムへの参加を通じて“新しい仲間づくり”がしたい
- ③ alaが実施する事業で“運営のお手伝い”がしたい
- ④ alaの“パートナー（資金協力者）”になって支援したい etc.

コロナ禍の日常の中で感じていることや自分の身の回りで困っている人や活動のことなど、劇場のプログラムとつながることで“まちが元気に”なりそうなことがあればご相談ください。

お問い合わせ

alaまち元気そうだん室

☎ 0574-60-3311 FAX 0574-60-3312

✉ alamachigenki@gmail.com

*面会にて相談をご希望の方は、①訪問希望日（複数日）、②フルネーム、③電話番号、④ご相談内容または関心を持たれた理由を簡単にお知らせください。



「社会的処方研究所」の取り組み

日本における「社会的処方」の先駆者である西智弘さんからお話を聞き、今後の可児市におけるロールモデルを考える。



「孤立」という現代病を解決する「社会的処方」

コロナ禍で深まる「社会的孤立」。医療をめぐるさまざまな問題の上流には、この社会的孤立がある。認知症・うつ病・運動不足による各種疾患、こうした病に対して、薬で治療するのではなく、まちの中のつながりを使って元気にする「社会的処方」。この仕組みを広めようと「社会的処方研究所」を立ち上げ、社会的処方の実践に取り組んでいる医師 西智弘さんによるレクチャーを実施した。人の健康にとって大切なことは、運動や栄養はもちろんだが、もう一つに「社会参加」がある。WHOによる健康の定義の中では、「身体的・精神的に良好な状態だけでなく、社会的に良好な状態であることが健康である」と言われている。ここに「社会的」という文言が入っており、いま起きている「社会的孤立」は健康に大きな問題となっている。孤立していることで死亡率が上がり、それがメタボや喫煙といったことと同等もしくはそれ以上に寿命に影響することが分かってきた。そのため医療者も「孤立」という問題に取り組まざるを得ない。認知症の進行や自殺率、転倒率にも影響し、転倒率が上がることで転んで骨折して寝たきりになってしまうことが問題である。

この孤立という問題に対して、解決方法としてイギリスで「社会的処方」が生まれた。基本的理念は「人間中心性」「エンパワメント」「共創」の3つ。患者をリスペクトし、本人の視点に立って社会資源と繋いでいく「人間中心性」、その人本来の力を引き出す「エンパワメント」、多様な立場の人と対話をしながら個々に合う持続的な解決策を共に創り出す「共創」、この3つの視点が重要である。患者を地域資源に精通するリンクワーカーに紹介し、最適な社会とのつながりを発見し、患者自身が自らの健康とウェルビーイングを改善する持続的な解決策を作り出す「社会的処方」。この社会的処方の効果として様々な報告があり、孤独・孤立の改善、不安・抑圧の軽減、自己肯定感の向上、病院の紹介の減少など、病院の「医療資源」を使わなくても良くなることで、医療コストが下がるということが報告されている。

西先生の「社会的処方研究所」の要素には<Research、Factory、Store>という3つがある。まちの中でどんな社会資源があるか探しに行くResearch。そこで集めた社会資源を活用して仮想事例で処方箋をつくるFactory。それらの情報、知見をリンクワーカーに集約して、対象者にマッチングする暮らしの保健室などのStore。西先生は、社会的処方を国の「制度」にするのではなく、地域の「文化」にしていきたいと語っていた。リンクワーカーを国が育成するのではなく、今ある地域の様々なセクターの人間が横でつながり、みんなでリンクワーカーとなる社会を目指している。そこで必要なのは様々なセクターを結ぶハブ的な存在。それが暮らしの保健室なのか、コミュニティナースなのか、地域によって様々であろう。可児市ではアーラがその地域のハブになることができるのではないかと感じている。

日 会 講	程 場 師	2/28 ala レセプションホール 西智弘 川崎市立井田病院かわさき総合ケア腫瘍内科センター／緩和ケア内科医師 一般社団法人プラスケア代表理事
参 加 者		17人

「暮らしの保健室」から「マギーズ東京」へ

地域住民の健康や介護に関する「よろず相談所」としての「暮らしの保健室」、そしてがん患者とその家族の新しい相談場所「マギーズ」、この2つからアーラのまち元気そうだん室のあり方を考える。

人にはありのままでいられる 「第三の居場所」が必要である

家族をがんで亡くしたという経験から訪問看護師を志し、2011年に高齢化率が50%を超えた3,000世帯超の巨大団地「戸山ハイツ」で「暮らしの保健室」を開設、地域住民の健康や介護に関するよろず相談をスタートさせた秋山正子さん。秋山さんにとって訪問看護とは「究極の個別ケア」であり、当事者の考え方や置かれている環境に合わせて最適のケアを組み立てていくことで、専門家だけでなくご近所さんも含めた「地域」全体での医療・介護・福祉のチームづくりを目指していくものである。こうした活動の拠点となる「暮らしの保健室」は、病気でなくても生活に関するちょっとした相談をしたり、家族の病状や医療情報を交換したり、どんなことでも気軽に話して顔見知りになれる出会いの場所でもある。一旦知り合いになればいつでも気軽に相談できるようになり、ささいな会話から早期に病気が見つかって、そこから紹介されて病院に繋がることもある。今や「暮らしの保健室」は社会的な地域活動の一つとなって全国に広がってきている。

また秋山さんは、英国のがんケアリングサポートの「マギーズセンター」と繋がり、がん患者とその家族の新しい相談場所として2016年から「マギーズ東京」を立ち上げた。病気(がん)のあるなしに関わらず、病気に関わる全ての人たちに開かれた場所として、一人一人に向き合い、友達のように傾聴することで、病院と家との間にある「第二の我が家」として訪れる人たちが自分らしさを取り戻せるようサポートを行う活動を行っている。

「人には、家では家で見せる「顔」、職場では職場で見せる「顔」があり、担っている役割が違うために、ありのままのでいられる第三の居場所が必要になるのだと思う。病気に関わる人も同じ。病院でも家でもないもう一つの居場所がある。丁寧にもてなされ、尊重されている空間が用意されているということ。マギーズセンターの運営の柱は、<建築と環境>とく<ヒューマンサポート>の二本柱。建物だけでもダメだし、相談を受ける人が用意されるだけでもダメで、両方が揃ってはじめて一つだということが、マギーズセンターの特徴です」

秋山さんの言葉は温かく、そして力強かった。アーラが可児市の地域劇場としてその恵まれた空間とこれまで培ってきた文化芸術のプログラムを活かしながら実践しようとしている「社会的処方箋」と「地域間パートナーシップ」の在り方を考えていく上で、この2つの事例はたくさんの気づきと学びを与えてくれている。



日 会 講	程 場 師	3/17 ala レセプションホール 秋山正子 訪問看護師／特定NPO法人マギーズ東京共同代表理事・センター長
参 加 者		15人

認知症対策のための演劇情動療法

演劇を活用して人間の情動機能を活性化させることで、認知症の症状の改善をもたらす「演劇情動療法」についてのレクチャーと、その実践について学ぶ。



演劇を活用して、苦悩的情動を忘れさせ、歓喜的情動を高める

認知症は、「高次脳の機能が病的に低下し、日常生活に著しく支障をきたした状態」と定義されており、記憶が定かでなくなる症状や、BPSDと呼ばれる興奮状態や攻撃的な行動・心理症状をもたらす。BPSDの症状がでると、日常生活に支障をきたすことになり、これが原因で入院することになる。入院時にはBPSDに対し様々な向精神薬が使用されるが、誤嚥性肺炎や転倒による骨折など重篤な合併症が起こりやすい。このため藤井先生の仙台富沢病院ではこの薬を削ぐために演劇情動療法を取り入れているという。抗精神病薬で苦悩的情動指数を一時的に下げることができるが、それでは人間の情動機能が低下してしまう。認知症患者は、認知機能が下がっていても、情動機能が高いままの患者が多く、演劇などの文化芸術を介したプログラムに反応し、苦悩的情動を忘れ、歓喜的情動を高める効果があり、これによって精神が安定し薬の投与も減らすことができるという。文化芸術の医療への活用例を先生からお話いただいた。

後半は、実際に患者さんに演劇情動療法を行っている前田さんから、朗読のデモンストレーションと、患者さんの情動を刺激する上で心構えをお聞きした。演劇情動療法を行う上では、朗読をする技術、演じる力も必要であるが、患者さんを思いやる心が必要で、その場で一緒に物語を患者さんと共感することが大事。そしてこの療法がどういった効果をもたらすのかのエビデンスの知識も必要で、これを＜芸＞＜心＞＜論＞と演劇情動療法の3要素として解説いただいた。

今回のこの講座には高齢者サロンの運営をされている方、地域で活動する朗読サークルの方々などに参加していただいた。今後、可児市において演劇を活用したこうしたアプローチを参加した方々と共に生み出していきたい。

日 会 講	程 場 師	3/11 ala 美術ロフト 藤井昌彦 東北大学医学部臨床教授／仙台富沢病院理事長 前田有作 日本演劇情動療法協会理事長／劇団LGT主宰
参 加 者		レクチャー 16名／WS 13名



藤井 昌彦



前田 有作

あーとま塾 特別編

アーラの社会包摂の考え方と具体例を題材に劇場や地域の課題に携わる関係者と意見交換し、社会機関としての劇場運営について学び合う。



アフター・コロナに向かって劇場の新しい役割を考える

あーとま塾は、アーラの地域貢献・社会包摂に関する考え方と具体例を題材に劇場に関わるさまざまな立場の人たちと意見交換し、社会機関としての劇場運営を学び合う場である。参加者が一方的に講師のレクチャーを聞くだけでなく、グループワークの時間を設け、インプットだけではなくアウトプットもできるゼミとなっており、毎回終了後にはレポートを提出することで参加者がゼミの内容を振り返り、自分の言葉で整理することを促し、また参加者同士で課題を共有し議論を深めていくことを目指して、年3回、1泊2日の合宿形式を採用している。

今年度は施設の大規模改修とコロナ禍の影響により、年1回の開催となったが、「アフター・コロナにおける劇場の役割」という緊急テーマに沿って、コロナ禍でのソーシャル・ディスタンスに伴う「地域コミュニティの機能不全」への対応策として、「感染拡大防止策」「経済再生策」だけでなく、文化芸術による「つながりの維持と強化策」を加えての＜トライアングル課題解決＞を考察する特別編となった。

アンケートに書かれた意見によると、新規の受講者からは、「ロジックモデルの作成が現場に還元できると思った」「ロジックモデルをより实际的に意義や効果を検証するためにもう一度練習したい」など、ロジックモデルの活用に対する要望（Know Whyを探究する必要性）が多くあった。一方、複数回参加している受講者からは、「参加型演習やフィールドワーク」「多くの実例の検証を知りたい」「より広い人脈の形成」を望む声があり、社会課題解決のための実践（Know Howを手に入れる必要性）を求める傾向が見られた。

日 会 講	程 場 師	2/26～2/27 ala レセプションホール 衛紀生 ala館長 兼 劇場総監督 八木匡 同志社大学経済学部教授／文化経済学会(日本)前会長 落合千華 ケイスリー株式会社取締役／Arts United Fund発起人
	ワークショップ ファシリテーター 参 加 者	今尾江美子 ケイスリー株式会社ディレクター 14人 延べ 28人



報告書ダウンロードはこちら

えんげき創作ワークショップ

公募で集まった小中学生が2日間で小さなものがたりをつくって演じるく共創体験>プログラム。



創作テーマ「もしも一日一言しかいえなかったら!？」

STORY

とある学校のとあるクラス。

ある日、コロナの感染拡大によって、首相から突然発令された緊急事態宣言は、

「一日、一人、一言しかしゃべってはならない!」というトンでもないものだった!

どうする?こどもたち。政府から支給された「罰点マスク」によって、

一度は失われかけたコミュニケーションを取り戻すため、

楽器や踊りを使って「言葉を使わずに」お互いの気持ちを伝えあう作戦を思いつく。

“昨日より今日”という実感を持てるものであること、 そういう可能性が演劇にはある。

コロナ禍で2021年度に延期となった大型市民参加ミュージカル『君といた夏』。今年参加しようと意気込んでいた子どもたちに何かできないかと、これまでの市民参加公演に参加した子どもたちを中心に8才から15才を対象とした「えんげき創作ワークショップ」を開催しました。今回の企画で講師を務めたのは、アーラが「地域拠点契約」を結ぶ文学座のくこどもえんげきフェス担当>のあっこさん(鈴木亜希子)、ノビくん(西岡野人)、はるき(相川春樹)の3人組。いずれもアーラの「文学座俳優による子ども向け舞台」で講師を務めたことのある可児ではおなじみの俳優さんたちです。

集まった子どもたちの表情は、久しぶりの仲間との再会に嬉しそうな顔もあり、初めてで緊張しているのか不安そうな顔もあり。そんななか初日の稽古は、この日のためにノビくんが作ってくれたテーマソング「かにずちけつと」を覚えることから始まりました。久しぶりのワークショップ、子どもたちはスポンジのようにすいすい歌と踊りを覚えていきます。続いてストーリーづくり。創作テーマは「もしも一日一言しかいえなかったら!？」。あっこさんたちが考えてきたコミカルなメインストーリーと、セリフも身ぶりもコロナ禍の中で参加者たちが経験したことや過去の思い出から出てきたリアルな出来事を元にオリジナルでつくり上げるシーンが一つになっていきます。シーンが出来上がるとすぐに演じ、お互いに見てアイデアを出し合う、もう一度考える、さっき出会ったばかりの子どもたち同士がいつの間にかすっかり打ち解けて共に作品づくりに没頭していました。2日間しかない稽古は初日からフル・スロットルで進み、気がつけばあっという間に終わりの時間、「すごく進んで、明日もがんばろう」とあっこさんの言葉。

2日目は朝から小道具や鳴り物、パンフレットの準備などが着々と進行、本番に向けた通し稽古も順調に終わり、あとは客入れを待つばかり。「緊張しているけど、久しぶりの発表会なのでとても楽しみ」「練習の時に間違っちゃったから、本番は間違えずにやりたい」と子どもたち。発表会に招かれて客席を埋めたのは、お父さん・お母さんやおじいさん・おばあさん、学校の先生など子どもたちにとって身近で大切な人たち。マスクをつけて笑い声は出せないけれど、子どもたちがつくり上げた約20分間の小さな音楽劇を観る目は皆、笑顔、笑顔。

「子どもたちに自分自身の可能性をたくさん感じてほしい。コロナ禍の中でできないって失望を感じる事が多くなってきているから。自分を信じてあげる、愛してあげるってこと、存在していいんだってこと、昨日より今日っていう実感を持てるものであること、そういう可能性が演劇にはある。今回は2日間だったから、そういう意味でも演劇にはかなり即効性があるってことを確信できた気がする。」

演出のあっこさんの言葉を裏付けるような、終演後の子どもたちと家族の笑顔に包まれて怒涛の2日間は優しく幕を閉じました。

稽古日程	3/13、3/14 午前	講師	ファシリテーター・演出:鈴木亜希子(文学座)
公演日程	3/14 午後	アシスタント	相川春樹(文学座)、西岡野人(文学座)
会場	ala レセプションホール		伊藤しおり、山田久子
集客数	24人(保護者)		
参加者	15人 延べ30人		

スマイリングワークショップ

不登校児童・生徒が通うスマイリングルームでのコミュニケーション・ワークショップ。



zoomを活用したリモートワークショップ

感染症拡大の影響により4月末～7月の小中学校でのワークショップの中止が決定された中、スマイリングルームの先生から「少人数のスマイリングルームで出来そうなワークショップを試験的にやってみないか」との打診を受け、東京在住の講師と可児のスマイリングルームをオンラインで繋いでのリモートワークショップを行いました。

対面のワークショップではないため、画面から外れた子どもたちの様子などは講師からは見ることができないため、例年以上に先生方とスタッフが子どもたちに目配りし状況を東京の講師に伝え、また会場全体を映すカメラをワイドレンズにすることで死角を少なくする工夫を施しながらの開催となりました。また先生方と、子どもたちの様子や活動の方向性について常に話し合いながらの活動となりました。

子どもたちはマスク着用のためワークショップ中に重要視している個々の表情が読みにくいという難点がありますが、タブレットを使っている活動だと、子どもたちの表情も、指先だけの動きなど小さく細かい表現も大きく映し出されるため、対面での活動では埋もれてしまうような、見落としてしまうような所まで拾えるというプラスの収穫もありました。

また、スマイリングルームにも通室していない自宅学習の生徒が、自宅からワークショップの様子を（自身のカメラはOFF状態として）見学し、自分でも実践してみたい状況をチャットで伝え、先生が返信をするという回がありました。リモートでの活動であるからこそ実現できた事でもありました。

ワークショップの目的のひとつでもある、他者と関わり合う活動としてインタビュー体験や、子どもたちひとりひとりの良い所を伸ばす試みとして（またひとりひとりの興味関心や思いをより深く知りたいという事もあり）リポーター体験なども実施してみました。結果、活動に積極的な子どもたちは参加する事ができるが、自分の意見を言う事が苦手な子や、事前に準備をしなければならない事にストレスを感じる子などは参加する事に消極的になっていくという事態となりました。先生方が子どもたちの変化に気づき、ワークショップの内容が実はとても高度な作業となっていた事を講師・スタッフと共有し、事前準備などが必要なく、子どもたちの即興性が鍛えられるような、また異年齢集団でありつつ皆で助け合える、楽しめ合えるような活動としていく事になりました。



活動を重ねていく中で、小学生と同じ内容を一緒に行う事に気恥ずかしさのような態度が見え始めた中学生が、ワークショップがある日は通室を控えようかという発言があった事を先生から伺い、それでは、スタッフとして一緒に活動してもらえないかと提案しました。見た目にもスタッフと分かるように現場ではスタッフジャンパーを着用してもらいました。すると、参加者として活動していた時にはなかった積極的な表情、姿勢を見せるようになり、準備や片付けまで自発的に手伝っていました。小学生の発表内容を講師に分かりやすいようにタブレットで大きく映し出す際も、ただ撮影するだけではなく発表に対して拍手をしてあげたりとその場が盛り上がるようなリアクションまでしてくれていました。回を増すごとに中学生の目の輝きに変化があり、スタッフに自分はどう動いたらよいか指示を仰いだり、自分の考えや意見まで伝えてくれるようになりました。見違えるような成長ぶりで自信が感じられました。改めてワークショップにはいろいろな関わり方があって、むしろスマイリングルームのような異年齢かつ敏感な感受性や不安定になりやすいなど、それぞれの子どもたちが抱えている心の状態が複雑な集団の空間では、関わり方についても多く担保する必要性もあるという事を再確認しました。

スタッフがスマイリングルームに度々伺う事で、自然と子どもたちと挨拶をしたり会話を交わすことも増えました。子どもたちから安心できる他者として受け入れられるようにこれからも関係性を築いていきたいと思います。

◆リモートワークショップ

日	程	7月～2月（計7回）	参	延
会	場	スマイリングルーム（総合会館内）	加	べ
			者	56人
			主	可児市
			催	

今年度最終日にはようやく対面ワークショップが実現



令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業『文化芸術収益力強化事業』
《エッセンシャルワーカーとしての文化芸術「社会的処方箋活動」の実践》

◆対面ワークショップ

日	程	3/23（1回）
会	場	総合会館 2F 会議室
参	加	9人
主	催	文化庁

◆リモート・対面ワークショップ共通事項

講	新井英夫（体奏家、ダンスアーティスト）
師	アシスタント
企	板坂記代子、松岡恭子、山田久子
画	（公財）可児市文化芸術振興財団
制	可児市教育委員会 スマイリングルーム
作	
協	
力	

ココロとカラダワークショップ

親子de仲間づくりワークショップ

乳幼児とその親が孤立することを防ぐことを目的に、コミュニケーション・ワークショップを通して、創造力や感受性を育みながら、親子で仲間づくり。



ココロとカラダの健康ひろば

60才以上を対象としたコミュニケーション・ワークショップ。継続的な参加によって、楽しみながら健康維持と、新たなコミュニティづくり。



2019年の様子

4月から通年のワークショップが始まるはずが、コロナ禍のために中止となってしまった「親子de仲間づくりワークショップ」と「ココロとカラダの健康ひろば」。参加者の子どもたちや親御さんは、外出自粛のストレスや先行きの不安を抱えているのではないかと。高齢者の方の中には、一人で暮らされている方もおり、お元気にされているだろうか、日が経つにつれ心配になりました。ただ中止にするのではなく何かしなければと、つながりを絶やさないために4月から毎月お手紙を郵送し、5月から講師によるビデオレターのような形でDVDを作成しました。そのDVDには、ワークショップで実施している内容を盛り込み、ご自宅で各自でカラダを動かし、想像力を働かせるものに。また5月からzoomを活用してリモートワークショップを毎月開催し、その中で雑談タイムも設けコミュニケーションをとりました。操作が分からない方にはレクチャーを行い、自宅にインターネット環境がない方には、サテライト会場としてアーラに来館していただき、PCとインターネット環境をこちらで用意してzoomに参加してもらいました。

人と会うことが少なくなっている反動か、画面越しでも参加者の皆さんと顔を見合わせると気持ちが高揚し、「みんなに会えて嬉しいわ、涙が出そう」と言って投げキッスする方も。コロナ禍の窮屈な状態から解放され、リモートでのワークショップの可能性を見出すことができました。

- ・コロナ禍で皆さんとの1時間がとても待ち遠しかった。体を使った運動、頭を使って考えることもあり、自分に当たるとドキドキしたり、あたたかい雰囲気が好きです。話が苦手な私も少し気持ちが楽になったり、また頑張ろうと思うようになりました。
- ・皆さん対等な立場で交流できることが嬉しいです。情報とか経歴とか関係なく楽しく交流できることは精神的にもとても良いと思います。



日程	5/27～12/16 (計8回)
会場	オンライン(サテライト会場: ala 音楽ロフト)
集客数	88人
講師	新井英夫(体奏家、ダンスアーティスト) Ten seeds(劇・あそび・表現活動)
アシスタント	板坂記代子、松岡恭子



1年ぶりの対面ワークショップ

今年度はzoomでのリモートワークショップを続けてきましたが、約1年ぶりにアーラに集まってワークショップをすることができました。

輪になって歌を口ずさみながら隣の人をマッサージ。「今日はリモートじゃなくて触れるねー」「背中があったかくなってきたわ」と皆さん人に触れられることが久々のようで嬉しそうです。今日のお題は、カラダで花木を表現。ペアになって何の花にするか想像しながらカラダを動かしていきます。お互いの動きを意識しながら咲き誇る花々。こうした表現ができるのは対面ワークショップの醍醐味。リモートでもできること、対面でしかできないこと、状況によって組み合わせながら、今後も活動を続けていければと思います。



令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業『文化芸術収益力強化事業』
《エッセンシャルワーカーとしての文化芸術「社会的処方箋活動」の実践》

◆ココロとカラダの健康ひろばく対面ワークショップ>

日程	3/4, 3/24
会場	ala レセプションホール
講師	新井英夫(体奏家、ダンスアーティスト) Ten seeds(劇・あそび・表現活動)
アシスタント	板坂記代子、松岡恭子
参加者	15人(8人、7人)

高齢者サロンにおでかけワークショップ

地域の活動を知るために市内に90カ所程ある「高齢者サロン」のうちの一つ、広眺ヶ丘サロン・三々五々にお邪魔しました。毎週、歌をうたったり、演奏を聴いたりと独自に文化芸術プログラムを行っている三々五々。コロナ禍で7週間中止が続き、この日は待ちにまった再開の日でした。「久しぶり〜」「元気そうだね」、スタッフの皆さんがお越しの地域の方々と温かく迎えています。Ten seedsさんによるワークショップで頭と体を使った遊びをして笑顔が溢れます。こうした場を地域で作っている方々とアーラが協力できることを今後も考えていきたいと思っています。



令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業『文化芸術収益力強化事業』
《エッセンシャルワーカーとしての文化芸術「社会的処方箋活動」の実践》

◆ココロとカラダの健康ひろばくアウトリーチ>

日程	3/4
会場	広眺ヶ丘第一集会所
講師	Ten seeds(劇・あそび・表現活動)
アシスタント	松岡恭子、山田久子
参加者	31人



多文化共生プロジェクト

様々な異なる言葉や文化を持った人々が1つの舞台作品を作るプロジェクト。今年度は映像メディアによる作品を制作。



多様なルーツ持つ市民と共に創り上げる演劇

可児市の人口の約7.8% (2020年7月1日現在) は外国にルーツのある人。アールでは国籍も年齢もさまざまな参加者たちが同じ時間を共有しながら1つの舞台を作り上げる「多文化共生プロジェクト」を2008年から実施しています。毎年、様々な言葉や文化を持った人々が集い、ひとつの舞台作品をつくりあげていますが、今回はコロナ禍で参加者が集まることが難しい状況。講師の鹿目由紀さんと前年度の参加者と相談し、やれることをやろうとzoomを使った作品づくりに挑みました。

国籍・年齢に関係なく集まった参加者がインタビューで語った仕事(トラバーク)に対する考え方から見えてくる、多様な人生の在り方を、一人の人間の人生に例え、クレイアニメーションで表現したドキュメンタリー演劇手法の作品です。作品の元になった参加者へのインタビュー、稽古、レコーディングまですべてをオンラインで行いました。

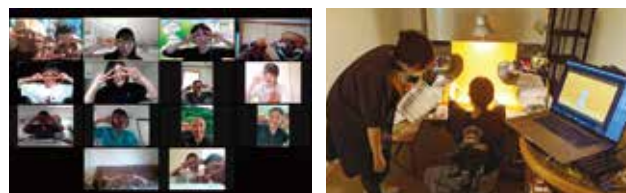
コロナ禍での妥協案としてのオンラインでの活動でしたが、プロジェクトが進むうち、色々なメリットにも気がつきました。活動の場がアールから各参加者の自宅に変わったことで、今まで参加できなかった妊婦さんや在宅介護中の方、地球の反対側ブラジルに住んでいる参加者の家族など、今まで参加できなかった人が参加できるようになりました。参加人数は総勢53人で、過去最多。また、コロナでそれぞれに不安を抱える時期でしたが、交流会や稽古で定期的にオンライン上に集まって、多文化共生プロジェクトに参加している仲間存在を互いに確認できたことは、とても心強いことでした。

作品はプロジェクト着手から約半年の時を経て11月29日に完成。参加者、演出の鹿目さんとともに、感染症対策をしたアールで完成記念の上映会を実施。いつものようなハグや握手はできませんでしたが、モニター越しではない久々の再会を喜びました。

外国籍市民の多い可児市だからできるこのプロジェクト、参加者がそれぞれ持っている文化的背景による違い、それぞれに抱える思いに耳を傾けることは、多文化理解につながるだけでなく、関わる人すべての人生を豊かにするヒントになっていくのだと思います。

◆対面ワークショップ

創作日程	6/17 ~ 10/4 (計18回)
公演日	上映会&交流会 11/29
公演会場	ala 美術ロフト
声の出演者	53人



アール紙芝居一座

地域の演劇好きが集まり、演劇的要素を取り入れたオリジナル紙芝居を創作し、可児市近隣の施設を巡演公演を実施。今年度はコロナ禍のため、オンライン紙芝居を創作。



コロナ禍だからできたオンライン紙芝居

2020年3月にこれまでの活動の集大成として紙芝居フェスティバルを企画していましたが、コロナ感染拡大防止のためにやむなく中止となってしまう、メンバー一同大変悔しい思いをしていました。さらに追い打ちをかけるように政府の緊急事態宣言が発令。今後の活動自体が不透明となる中、4月下旬に数ヶ月ぶりにオンラインでメンバーが集まりました。自粛期間中は人との接触に怯え、不安や寂しさが募っていたせいか、久しぶりの再会に皆が喜び合ったことを今でも覚えています。また、その会合でコロナ禍における今後の活動について話し合いました。人と繋がることの嬉しさを改めて知ったメンバーたちは、オンラインで活動を継続していくことに喜びと希望を見出していました。幸い紙芝居は絵とセリフで表現するため、オンラインでの稽古が可能です。そこで、オリジナルの紙芝居動画をオンラインで創作することにしました。

作品は誰もが知っている「うさぎとかめ」を原作にうさぎとかめのその後のストーリーも描いた『うさぎとカメ太とカメ次郎』というオリジナル作品です。最初は慣れないオンライン稽古で、途中で電波が切れてしまったり、音声が届いてしまったりと、四苦八苦していましたが、それも徐々に慣れてゆき、それぞれ役に合わせて声色を変えたりと、時間を掛けながら丁寧に魅力あるキャラクターを作り上げていきました。紙芝居のイラストも絵の得意なメンバーが描いたオリジナル・イラストです。通常の紙芝居は30枚程度のイラストですが、オンラインでは画面の切り替えが容易にできるため、台詞ごとに絵を変えたりするなど、約100枚ものイラストで登場人物の心情を細かく描写していきました。さらに編集段階で効果音や音楽など臨場感を高める演出を加え、いよいよ動画の完成です。その創作期間は約1年。3月14日に出演者らが集まり、試写会を行いました。上映が終わると、「すごく良かった!」「こんなに面白くなるとは思わなかった!」など、たくさんの嬉しい声をいただきました。

コロナ禍だったからこそ、オンライン紙芝居にチャレンジし、紙芝居一座の新たな活動の場を広げる機会になったことは言うまでもありません。オンラインでつながれる。オンラインでも創作活動ができる。誰かとつながりたい。誰かに作品を届けたい。そんな紙芝居メンバーの純粋な思いが今回の成功を導いたのだと思います。

創作日程	4/25 ~ 12/27 (計16回)	会場	ala 映像シアター
公演日	試写会 3/14 (計2回)	声の出演者	13人 延べ168人

子どものためのワークショップ

ハndsオブガッド／親子de仲間づくりワークショップOB 編

子どもたちの非認知能力を育む「遊び」の体験づくり。



内と外との中間にある＜縁側のような場所＞へ

可児市今渡にある認可外保育園「ハndsオブガッド」にはフィリピンやブラジルから働きにやってきた労働者の両親を持つ3歳から5歳の子どもたちがたくさん通っています。今回、卒園間近の年長さんたち25人が初めてアーラに来訪し、保育園の部屋よりずっと広く天井も高い美術ロフトの空間に園児たちはすっかり大興奮！会場に着くなり大運動会が始まりました。ひとしきり走り回った後は水分補給とお手洗いを済ませていよいよワークショップがスタート。本日の講師は、俳優でインプロ（即興演劇）指導者の絹川友梨（ゆり）さんと「あそぶ」をテーマに活動するNPO法人アフタフ・バーバンのりっちゃん、きょんちゃんの3人。子どもたちは打楽器の音に合わせて「びたっ」と止まったり、窓際の出っ張りを線路に見立て、おしり歩きでリズムよく横に移動していく「おしり電車」などの遊びを楽しみながら、ちょっぴりお兄さんお姉さんの顔になって、自然とチームワークを学んでいきました。

しっかり動いた後は「絵本」の時間、今日のお話は『かいじゅうたちのいるところ』（作：モーリス・センダック／訳：じんぐうてるお）、イタズラしたおしおきに夕食抜きで自室に閉じ込められた男の子がかいじゅうの国に行ってしまうというお話。



お話を聴き、みんなでかいじゅうの動きの真似をしていると、りっちゃんときょんちゃんがかいじゅうの国に行くエレベーターの扉を発見！（実は美術ロフトの搬入口！）みんなで乗り込んでボタンを押すとたちまちかいじゅうの世界へ、さっきまで読み聞かせをしていたゆりさんが「お母さんかいじゅう」になっていて、大切な卵を失くして困っている様子。

「みんな、わたしの卵たちと一緒に探してほしいの！！」

さあ、子どもたちによる「かいじゅう卵の大捜査線」は瞬間にアーラの館内全体へ、警備のおじさんや清掃のおばさん、受付のお姉さんにも聞き込みをしながら、一個たりとも見逃さぬよう隅々まで探してくれている。続々と美術ロフトへ戻ってくる色とりどりの卵たち、実はビニール袋を丸めてセロテープで巻いたもの。それでも子どもたちは本当に大事そうに大きな風呂敷に優しく包んで温めて、無事にお母さんかいじゅう（ゆりさん）の元へすべての卵を届けることに成功しました。大きなミッションを果たし、ゆりさん、りっちゃん、きょんちゃんに、めいっぱい手を振って満ち足りた表情で会場を後にした子どもたち。次の年にはまた新しい年長さんたちがアーラにやってきてくれるはず。

「昔の日本家屋には、人が入ってしやすい縁側のような室内と室外の中間的な場所があった。アーラの空間はちょうどそういうふうになっていて、日常と創造が交じり合い、誰もが気兼ねなく集える感じがある。」ゆりさんの言葉を聴きながら、今日来てくれた子どもたちや今後いろんな国から可児を訪れるだろう子どもたちが、小学生、中学生、高校生、そして大人になってもずっと気軽に遊びに来て、アーラのプログラムにたくさん参加してほしいと願っています。

日	程	3/26、3/27（計2回）
会	場	ala 美術ロフト
参	加	延べ 44人
講	師	絹川友梨（俳優／インプロバイザー／東京大学大学院博士課程）
アシ	スタ	佐藤律子、平川恭子（NPO法人あそび環境Museumアフタフ・バーバン）、山田久子
協	力	ハndsオブガッド（保育園）



みんなのピアノプロジェクト

「ピアノを弾きたい」という夢や希望を心に抱きながら、家庭環境等の理由でそれを叶えることができない子どもたちに、その機会を提供する。付き添いとしてピアノ講師等が入り、子どもたちを見守りながら、子どもの可能性や達成感を育む。



▲ 感染症対策を実施しながらの開催



▲ 自宅で練習ができるようロールピアノの貸出も



▲ ママと連弾に挑戦

ピアノを通じて自己肯定感を育む

前期はアーラの改修工事期間中のためお休みとなっていました。10月から感染症対策をしながら実施しました。休み中もアーラから貸出しているロールピアノなどを使い自宅で練習をしていたようで、成長している姿がありました。通常はマンツーマンのレッスン形式のため、交流することのない参加者ですが、同じ企画に参加しているメンバーとして、一緒に参加できるプログラムも加えています。今年度はワークショップや、イルミネーションと一緒に点灯する機会をつくりました。点灯後、ロビーに置いたピアノを使い、集まったみんなで1曲ずつ披露をしました。最後は、先生が持参してくれたハンドベルを使って、一緒にジングルベルを即興で演奏しました。ある男の子の企画の参加動機に、「おじいちゃんに自分が弾いたピアノを聴かせたい」と書いてあり、イルミネーションにおじいちゃんと一緒に来ていたため、念願のおじいちゃんにピアノを聴かせる機会を持つことができました。

アンケート

- ・おじいちゃんにピアノを聴かせたいという夢がかないました。
- ・先生に「上手に弾けたね」と言われてうれしかったです。来るたびに「ピアノ楽しいなあ」と思っています。
- ・わたしの目標は、先生も驚くピアノ少女になることです。そのために学校や家で練習したいです。

このみんなのピアノをきっかけにアーラの演劇公演に参加する子や、ワークショップに参加する子ができています。自分たちの好きなピアノから、アーラを身近に感じるきっかけになってくれていることを嬉しく思います。

日 程	10月～3月 月・木・金の指定日(計40日) ※前期は改修工事のため休講
会 場	ala 演劇練習室 ほか
参 加 者	19人 延べ186人
協 力	ピアノ講師・音大生 10人



▲ おじいちゃんにピアノを披露できたね



▲ みんなでハンドベルに挑戦

令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業『文化芸術収益力強化事業』
《エッセンシャルワーカーとしての文化芸術「社会的処方箋活動」の実践》

子どものためのワークショップ～みんなのピアノ編～

子どもたちの非認知能力を育む「遊び」の体験づくり。



はじめて会った子どもたちの中に生まれる一体感

「みんなのピアノプロジェクト」に参加している子どもたちを対象に、コミュニケーションワークショップを実施しました。講師は幼児教育番組「ひらけポンキッキ」で6代目のお姉さんを担当した石丸有里子さんと、フランスでコントーション(軟体芸)を学んだコントーション女優のユニコさんのコンビです。子どもたちが普段意識していないカラダの隅々まで意識を巡らせるエクササイズと、見えないものをイメージーションで共有する手法で、友達と一緒に遊ぶことの楽しさを感じさせてくれる内容でした。

いつものピアノの時間では先生とマンツーマンで行っているレッスンですが、今日はみんなで集まってワクワクドキドキの時間。初めて会う一緒に企画に参加するお友達と2人ペアになって、相手の動きを鏡のようにマネする動きや、影のようについていく動き、スローモーションでの徒競走など、恥ずかしがりながらもお互いの動きに注視しながら行っていました。次に見えない縄での縄跳びや綱引き。そこに想像上の縄があることを意識しながら、お母さんたちも一緒にカラダを思いっきり動かしました。いろんなワークをしながら、お互いの想像力を共感し合い、カラダで表現していくことで、ココロもほぐれ、はじめて会った方々の中に一体感が生まれていきました。

最後は日頃のピアノの練習の成果をみんなの前で披露しました。座って演奏を聴くだけでなく、曲に合わせて講師の石丸さんが動きをつけていきます。「ねこふんじやった」を弾いているときは、子どもたちとネコのマネをして曲に合わせて動きまわりました。まだまだ、やり始めたばかりの曲でも果敢に挑戦し、止まってしまう子もいましたが、同じ曲を練習している子が隣に寄り添って、次の音符を教えながら最後まで演奏を手助けするシーンもありました。こうしたワークショップの機会を今後もつくって子どもたちのつながりを作っていきたいと思います。

日 程	3/7 (計2回)
会 場	ala 美術ロフト
参 加 者	28人
講 師	石丸有里子(俳優/劇団鳥獣戯画)
アシスタント	ユニコ(俳優・ダンサー/劇団鳥獣戯画)
協 力	みんなのピアノプロジェクト 講師



アーラ映画祭

Project 9

市民実行委員が、多様な人が鑑賞できる機会と環境を作り、繋がりを広げる。



映画館がない可児で、映画を通して繋がる、世代を超えた交流。

実行委員の打ち合わせは、最近観た映画の話題からはじまります。30代～70代と幅広い世代が集まり、交流が生まれています。今年度は、オンラインミーティングで作品選定。当初の予定から延期となり、規模を縮小した形での開催になりましたが、多くのお客様にご来場いただき、すべての日程でほぼ満席となりました。コロナ禍において、お客様との交流が難しくなりましたが、実行委員が掲示したおすすめ映画コーナーや、上映作品に関連した「思い出の料理」のイラストコーナーでは、お客様が熱心に見てくださっている姿が印象的でした。

日 程	プレ上映:1/24～25(計4回)／映画祭:3/20～22(計7回)
実施回数	ミーティング23回
会 場	ala 映像シアター
集 客 数	430人
参 加 者	市民実行委員27人 延べ201人
共同主催	アーラ映画祭実行委員会

エイブル・アート展 ～アートで生きる生命のてざわり～

PROJECT 10

障がいのある人たちが「生」の証として生み出した作品を「可能性の芸術」として紹介する展覧会。



アーラ史上一番カラフルな空間が出現

今年のテーマは「アートで生きる生命のてざわり」。自分の存在を表現する作家の表現、生命のきらめきが詰まった作品を選んで展示を行いました。今回はコロナ禍で暗くなった気持ちを明るくしたいという思いから、特にカラフルでエネルギー感あふれる作品を展示作品に選んだことも展示の特徴です。原色に近い色を使った色鮮やかな作品が並んだカラフルな展示会場になり、地元の方からも「元気が出た」と例年以上に喜ばれた印象がありました。

日 程	【展示】3/13～21 ※16日休 【勉強会】3/19	出展者	福井将宏(アールスペースカラフル/鳥取)、 小早川桐子(アトリエ・ブルート/愛知)、 野口昌裕(兵庫)、 青木優(たんぼの家アートセンターHANA)、 黒野大基(Good Job!センター香芝/奈良)、 可児市内支援学級児童生徒
会 場	【展示】ala 美術ロフト 【勉強会】オンライン(zoom)		
集 客 数	404人		
企画・協力	(一財)たんぼの家、(社)わたぼうしの会		
協 力	(公財)岐阜県教育文化財団 TASC岐阜		
共同主催	可児市		

森山威男ドラム道場

Project 11

可児市内在住の日本を代表するジャズドラマー・森山威男氏によるドラム講座。



アーラで開催された森山威男さん出演ライブ、ピアニストの田中信正との「ドラムDUOコンサート」にドラム道場に通っている中学生が飛び入り参加し、客席を湧かせました。

ドラム演奏を通して学び、それぞれの一步前に進む

参加者の年齢は小学校低学年から年配のジャズファンまで様々。ドラム道場で得ているものは人それぞれだと感じます。ドラムの基礎、森山さん秘伝のテクニック、森山さんや音楽好きの仲間との交流、人生のヒント。学ぶものは様々ですが、全員感じているのはドラム演奏の楽しさ。「楽しくなければ意味ないね!」森山さんも楽しむことを基本に、ドラム道場の熱いレッスンは続いています。

日 程	通年 毎週月曜日(計23回)
会 場	ala 音楽ロフト
参 加 者	延べ129人
講 師	森山威男

歌舞伎とおしゃべりの会

PROJECT 12

知識の有無にかかわらず、誰もが楽しめる気軽な歌舞伎講座。



暗い気持ちが吹き飛んでいく時間

今年度は豪華講師陣に加えゲストに歌舞伎役者の市川猿弥さん、片岡千之助さんをお招きしました。改修工事後の久々の講座だったので、会場に来て「まっていた!」とスタッフに声をかけてくださる方がいました。コロナ禍で「外に出るきっかけがなく、気持ちが暗くなっていた」という年配の方も帰りは笑顔になって帰っていかれました。歌舞伎の華やかな世界にしばし浸り、コロナ禍の暗い気持ちを忘れて楽しい時間を過ごして頂けたのではないかと思います。

日 程	10/18、11/28、12/20、2/14(計4回)
会 場	ala 美術ロフト ほか
集 客 数	延べ 243人
講 師	葛西聖司(古典芸能解説者)、 木ノ下裕一(木ノ下歌舞伎主宰)
ゲ ス ト	市川猿弥(歌舞伎役者)、 片岡千之助(歌舞伎役者)
協 力	可児歌舞伎

東日本大震災復興支援 祈りのコンサート

東日本大震災以降続いているコンサート。公演の収益とお客様からの支援金は、被災地の心の復興のために被災者支援団体に寄託。



「忘れない」を合言葉に、演奏に想いをのせて復興を願い、
震災で犠牲となった方々や現在もお苦しんでいる方々、
そして被災地の未来に想いを寄せる。

東日本大震災から今年で10年。アールでは、可児から東北へ思いを届けようと震災の年からこのコンサートが続けてきました。今回参加いただいた演奏家は、昨年コロナの影響で中止になった時と同じメンバーで、コンサートの趣旨に賛同いただいた西江辰郎さん、長谷川彰子さん、森浩司さん。

感染症対策で客席の稼働を50%に抑えての開催でしたが、チケットは完売。みなさんの被災地に対する「忘れない思い」そして「復興への願い」の強さを実感しました。公演は、「G線上のアリア」の献奏の後、黙とうを行ってはいじまり、終盤には、可児市も舞台になったNHK大河ドラマ「麒麟がくる」メインテーマを演奏し、皆さんの気持ちが一つになっていくのを感じました。アンコールでは定番となった「君といた夏」「翼をください」を心の中で口ずさみ、多くの方とともに演奏に想いをのせて復興を願い、そして被災地に想いを寄せることができました。

お客様からの募金	120,078円	寄託先	気仙地域傾聴ボランティア「こもれびの会」
公演の収益	126,722円		傾聴ボランティア「大槌ひまわり」
寄託金合計	246,800円		傾聴ボランティア「こころのもり」 宮古地域傾聴ボランティア「支え愛」 公益社団法人宮城県精神保健福祉協会 みやぎ心のケアセンター

日程	2021年3/7
会場	ala 主劇場
出演者	ヴァイオリン：西江辰郎（新日本フィル コンサートマスター） チェロ：長谷川彰子（新日本フィル チェロ首席奏者・多治見市出身） ピアノ：森浩司 ナビゲーター 佐野秀典（作曲・編曲家）
集客数	412人
協賛	株式会社カラピナ、ホテルルートイン可児、株式会社松栄堂楽器 可児店、株式会社トイ・ファーム、 株式会社ワンズ・プランニング、岐阜県舞台設備管理事業協同組合、ハーモニーワークス、じゃぱん SANDWICH、 丸理印刷株式会社

私のあしながおじさんプロジェクト

地元企業・団体・個人の寄付により中学生・高校生へアールの公演チケットをプレゼント。経済的支援を受けているご家庭を対象とした For Familyも実施。今年度からは「ピアノを弾きたい」という夢を叶えられない子どもたちに、地元ピアノ講師や音大生がレッスンを
行う「みんなのピアノプロジェクト」にも活用を開始。



コロナ禍の状況下でやむを得ず今年度の協賛を控える動きもありましたが、それでも引き続き例年と同額を寄付くださる企業や、特別定額給付金の10万円を「みんなのピアノプロジェクト」のために寄付したいと個人の方（新規）が申し出てくださるなど、子どもたちにチケットを進呈するのに十分な金額が集まりました。

1月7日に2回目の緊急事態宣言が発出されるなど感染拡大の影響もあってか、例年よりも鑑賞希望者に伸び悩みがありました。また、鑑賞希望をし、招待状が届けられたが、公演当日に本人や家族に体調不良があり周囲に迷惑をかけてしまうかもしれないとキャンセルを選択した兄妹もありました。そのような中でも、鑑賞が叶った子どもたち、For Familyの家族からは心が弾むようなあしながおじさんへの感謝の手紙が届けられました。

嘶家によっても
色んな話し方があると分かった。
最後は笑うというよりも感動した。
(中学3年／初席)

お母さんもばーばも
僕も喜んでいました。
(For Family 小4／新日本フィル)

初めて本格的な公演を見て、
自分たちの演劇を見直す
きっかけとなった。
(高校1年／文学座)

- 対象公演
- ・「かに寄席 初席」1/30(土) 14:00 主劇場
 - ・「風間杜夫 落語独演会」2/3(水) 18:00 小劇場
 - ・「新日本フィルハーモニー交響楽団 アール・リニューアル記念コンサート」2/7(日) 16:00 主劇場
 - ・文学座公演『昭和虞美人草』3/27(土) 17:30、3/28(日) 14:00、3/29(月) 14:00 小劇場

日程	2021年1月～3月(計4公演)
会場	ala 主劇場・小劇場
参加者	鑑賞者 延べ40人(内 For Family 25人)
協賛	15企業・団体・個人から(P3掲載) 計490,000円
協力	可児市(福祉支援課)、可児市教育委員会(学校教育課)

アーラ・イルミネーション

Project 15

アーラで冬の思い出づくり。毎晩1組のお客様によるイルミネーション点灯式を開催。



憩いの広場に灯る冬の光

季節行事として定着したアーラ・イルミネーション。点灯のボタンは毎日、応募された市民の皆さんに押しいただいています。すぐに49日間すべての予約がいっぱいになるほどの人気です。初日の点灯ボタンを押してくれたのは、元気な子どもたちのグループ。昨年イルミネーションをみかけて、1年越しで点灯ボタンを押すことを楽しみにしてくれていたようです。ボタンを押して、パッと広場を彩るイルミネーションに声をあげて喜ぶ姿は、立ち会っている職員まで温かい気持ちにさせられます。コロナ禍で体験するイベントが少なくなっている中、このイルミネーションがご家族、ご友人、大切な方と過ごす思い出の時間となってくれたらと思います。

日程	12/5～2/7(49回)	参加者	220人
会場	ala 水と緑の広場	協力	NPO法人alaクルーズ

劇場フロントスタッフ研修

Project 16

劇場でお客様をおもてなしするフロントスタッフ養成講座。



安全安心なおもてなし

大規模改修工事後の1月からの公演再開に向け、フロントスタッフ研修2回実施しました。1回目の座学では、コロナ対策編としてどのように観客を迎え入れるか。客入れ(消毒・検温・もぎり)や客だし(分散退場)の流れなどを確認する研修を行いました。2回目はフォローアップ研修として、実際の公演日に講師である星乃氏のリードの下、各種サインボード案内によって極力飛沫を発生させない工夫を施しながら、シールド越しでも終始笑顔を絶やさぬおもてなしができ、スタッフにとって大きな自信となりました。

日程	1/16、1/30	参加者	29人
会場	ala 研修室、主劇場	協力	NPO法人alaクルーズ
講師	星乃もと子(Theatre Management Plan Co.,Ltd. 代表)		



”私たちのまち”が
もっと元気になるために、
一緒に考えませんか？

アーラは地域の課題に対して、
様々な団体・機関・専門分野の方々と結びつきを強め、
共に解決のアプローチを模索していきたいと思っています。
こうした活動に関心のある方はお気軽にご連絡ください。

ala まち元気そうだん室
Tel:0574-60-3311 Email: alamachigenki@gmail.com

「alaまち元気プロジェクト」
レポートを下記のサイトに掲載！



チェック!!

<https://www.kpac.or.jp/ala/town>

2020年度alaまち元気プロジェクト実績

合計

実施回数 234回 うち稽古実施回数 58回
参加者数 延べ1,425人 集客数 1,513人

alaまち元気プロジェクト ★ パートナーグッズ ★



シリコンバンド
500円(税込)



ピンバッチ
500円(税込)



マグカップ
700円(税込)



クリアファイル
100円(税込)
※2枚1組

賛同の気持ちとして購入いただき身に着けることで応援していただいています。